

春よ来い 早く来い来い
早く行け

今年の東京は、初雪を見ないまま三月を迎える記録的な暖冬でした。秋からそのまま春になったような気候のせいで、一月末にはもう杉花粉が飛び始めました。日本人のおよそ7割はアレルギーを起しやすい遺伝子をもっていると言けば、昨今の花粉症患者の増加や低年齢化もむべなるかなです。

春の訪れは誰にも待ち遠しいものですが、冒頭の川柳は花粉症の人ならではの、同病者はまさに同感というところでしょう。

ひるまだより

2007.03 vol.14



医療法人
ひるま 矯正歯科
Hiruma Orthodontic Office

立川市曙町2-9-1 菊屋ビルディング2F
TEL:042-526-3376/FAX:042-528-102

ドキュメンタリー・矯正治療

「アイデアルアーチ」

矯正治療の最初の実習はアイデアルアーチの屈曲練習です。矯正専門医になって10年、今でも最も神経を使うのがこのアイデアルアーチで、それは患者さんによって全て異なるからだと言えてでしょう。

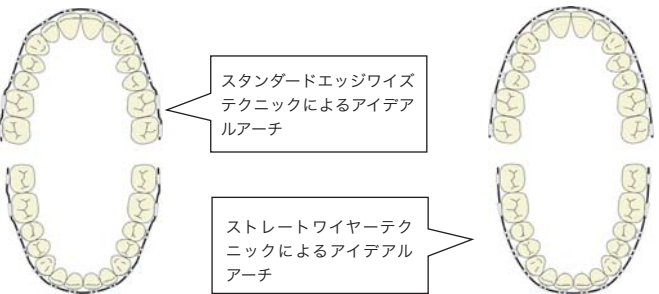
患者さんのお口の中を観察し、アイデアルアーチにバンド(曲げ)を入れます。そして次回診察時に歯や噛み合せの反応を見て微調整を加える事を繰り返して、理想的な咬合状態に仕上げます。私にとって矯正治療の技術とはアイデアルアーチに始まり、アイデアルアーチに終わると言っても過言ではありません。

歯の豆知識

アンチエイジング—序論

アンチエイジングとは抗加齢医学のことで、「健康と若さを保ちながら歳を重ねることを可能にする医学」と定義されています。アンチエイジングが叫ばれるようになった背景には、超高齢化社会を迎えるに当たって、いつまでも自分のことは自分ででき、社会の中で活躍できる生産性の高い人を増やそうという国の目標と、医療費削減のため、少しでも自分自身で健康な身体を維持してもらいたいという国の思惑があります。寿命まではピンピンと生き、最後の数ヶ月でコロリと死ぬ、これをPPK(ピンピンコロリ)とい

■スタンダードエッジワイズテクニックとストレートワイヤーテクニック



スタンダードエッジワイズテクニックによるアイデアルアーチ

ストレートワイヤーテクニックによるアイデアルアーチ

今号は、矯正治療の最終仕上げであるアイデアルアーチについて説明します。詳細はHPをご覧ください。

スタンダードエッジワイズテクニックでは歯の形態や歯軸の角度に合わせてアイデアルアーチに様々なバンド(曲げ)を入れるため、左上図に示すような形態となります。

しかし、ストレートワイヤーテクニックではブラケットに平均的なトルク、オフセット、テイクアップが組み込まれているためにバンドの入っていないストレートなアーチワイヤーが用いられます。

もし、どんな症例でも歯の形や歯根の傾きが平均値に近いのであれば、ストレートワイヤーテクニックによるアイデアルアーチでも理想的な矯正治療の仕上がりが得られるでしょう。

しかし矯正専門医院として長く患者さんを診てきた私たちは、患者さんによって歯のサイズや形態は大きく異なり、本来左右対称であるはずの歯が左右非対称である事も珍しくない事に良く知っています。そして、この違いを理解し、微調整を加える事がより高い矯正治療の仕上がりに繋がる事を身にしみて感じているのです。

平均的な歯や顎の形態を持たない症例でも安定した矯正治療の仕上がりを得るためには、1人1人の患者さんのお口の中に合わせたブラケットポジションやワイヤーの形態が必要となります。

だから私たちは、1人1人の患者さんに合わせてアイデアルアーチを曲げるスタンダードエッジワイズテクニックにこだわるのです。

脳の一部に損傷があると、フタのしまりが遅くなる人が多く、ことが分かってはいますが、ある研究では、歯ぐきを刺激すると脳が活性化し、フタのしまりが速くなる、特に、歯だけを磨いたときに比べ、歯と歯ぐきを同時に磨いたときに、より活性化することが分かりました。歯ぐきには神経が多く通っているため、刺激により脳が活性化したと考えられます。もちろん口の中を清潔にし、細菌を減らす意味も含めて、歯と歯ぐきを磨く—これが肺炎の最新予防法というわけです。

「ホット」の真実

あるテレビ番組で納豆ダイエットの虚偽放送が発覚して社会を騒がせましたが、NHK番組「ためしてガッテン」で時々やる医療系の内容は信用できると個人的に思っています。その中で、2月21日に放映された「死者急増!肺炎の真実」は、その予防法に含蓄のある話がありましたので、概説します。

肺炎による死者は年間10万人以上で、年々増加している原因は高齢化と薬の効きづらい細菌が増えているためだそうです。肺炎は、細菌が肺に入って炎症を起こす病気ですが、実は多くの人が日常的にこの細菌を持っており、ことに幼児は免疫が未熟なため、ほぼ全員が何らかの原因菌を保有していると考えられています。それでも滅多に肺炎にならないのは、〈肺に細菌を入れないシステム〉がしっかりしているからです。

ノドの奥は、途中から肺につながる気道と、胃につながる食道の2つに別れます。その分岐点に食べたものが来た瞬間フタが閉まって気道への入り込みを防ぎます。フタの開け閉めの速さは0.7秒。そうして呼吸と食事を両立させ、なおかつ肺を細菌から守っています。高齢者に多い誤嚥(ごえん)性肺炎は、この微妙なシステムの狂いによると分かってきました。

脳の一部に損傷があると、フタのしまりが遅くなる人が多く、ことが分かってはいますが、ある研究では、歯ぐきを刺激すると脳が活性化し、フタのしまりが速くなる、特に、歯だけを磨いたときに比べ、歯と歯ぐきを同時に磨いたときに、より活性化することが分かりました。歯ぐきには神経が多く通っているため、刺激により脳が活性化したと考えられます。もちろん口の中を清潔にし、細菌を減らす意味も含めて、歯と歯ぐきを磨く—これが肺炎の最新予防法というわけです。

いますが、これを達成するのは抗加齢医学だともいえます。現在の医学・歯学は臓器別、疾患別に細分化され特化する事で発展してきましたが、抗加齢医学では体全体を視野に入れ、脳、骨、眼、皮膚、筋肉、血管、口腔(歯や歯肉)から思考に至る横断的な対応が不可欠なため、その実践には他分野を包括した総合的な結びつきが必要になりました。老化を体感するのは眼そして口腔だといわれるように、抗加齢医学における歯科の役割

はますます大きくなっていますが、実際、口腔が全身の健康に深く関わっていることは、研究や実験あるいは介護の現場などで分かってきました。

近年、老化や寿命を制御するメカニズムの解明は飛躍的に進み、これらの研究から老化の診断や対処法が進歩したことで、個人個人に合った抗加齢対策を講じることができるようになってきました。

▼このコーナーでは次回から、老いの仕組みやその対処法などについて述べていきます。